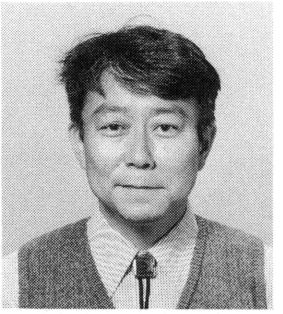
みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

異文化体験のコツ (教育の樹林)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久保, 正敏 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005926

異文化体験のコツ



国立民族学博物館・博物館民族学研究部教授
久保 正敏

1 はじめに

私は情報工学の出身だが、国立民族学博物館（略称民博）のコンピュータ民族学部門に所属し、民族学研究におけるコンピュータ活用に関する研究を行う一方で、一九八八年来、オーストラリア・アボリジニ研究グループに参加し、フィールドワークを続けてきた。工学系の人間がアボリジニ世界に足を踏み入れるという奇妙な体験談が、異文化接触の参考になれば幸いである。

2 互恵的フィールドワークを目指して

私の訪れたオーストラリア北部準州は、東部諸州とは異なり、アボリジニの伝統的な狩猟採集文化を比較的よく残している地域である。一九二〇年頃からアボリジニ保護領が設定されたためだ。第二次世界大戦後、アボリジニ領内に散在していたミッション・タウンを中核として、政府主導で町の建設と生活支援組織づくりが進められ、現在では、アボリジニ自身がそれらを運営し文化を支える一翼を担っている。

民博のオーストラリア研究グループが深いつながりをもってきたのは、そうした組

織の一つであり、四輪駆動車や散弾銃など現代の狩猟採集民に必要な耐久消費財の修理、社会保障費給付、美術作品の買い上げ、などの業務を行う公社である。民博グループに、これら業務のコンピュータ化を支援してほしいと依頼があり、私が応えることになったのである。

現地の人々から見れば、このプロジェクトによってコンピュータ化による業務の正確化・迅速化というメリットがある。他方、我々研究グループにとっては、業務支援ソフトウェアを介して彼らの文化にかかわるデータを入手できるメリットが生まれる。例えば、耐久消費財の修理記録からは狩猟採集活動の動き、美術作品の買い上げ記録からは彼らの芸術活動の動きや現金収入の動き、を総括的に把握できることになる。

このように、現地側と我々側の双方にメリットのもたらされる「互恵性」が、このプロジェクトの特徴である。私が積極的に参加しようとした動機は、この点にあった。

従来の民族学的フィールドワークは、現地から文化にかかわる情報を収集するばかりで、逆方向の還元を伴わないことが多かった。もっとも、「応用人類学」と呼ばれる分野があり、人類学の知見を現地で実践的に応用する試みも行われてはきたが、その歴史は必ずしも胸を張って語れるものではない。二〇世紀前半は、植民地経営への民族学応用が何の疑いもなく進められた。第二次大戦後には、第三世界での農村開発や土地改革が応用人類学の一環として進められたが、その多くは、「後進地域を近代化する」と言う先進国の思いこみに基づくものであり、しばしば現地住民の間に混乱や新たな格差を生み出し、伝統的な文化や社会、自然環境の破壊をもたらしがちであった。

こうしたことへの反省から、現在では、少数民族の権利擁護や自治確立のためにこそ、人類学を応用すべきだと考えられるようになってきている。

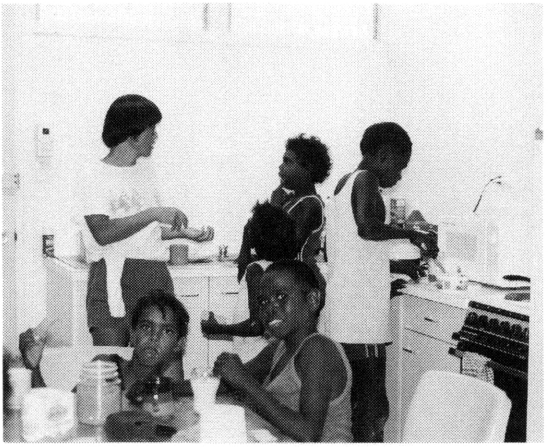
オーストラリアの民族学者たちが、アボリジニの土地権訴訟において、アボリジニの主張を学問的に裏付ける仕事を行っているのもその例である。オーストラリアでは、一九九四年一月から、アボリジニの先住権を認める法律が施行された。アボリジニの精神文化の基盤は、神話世界に基づいた儀礼であり、神話は土地と強く結びついている。白人入植者に奪われた聖地を回復するために、多くのアボリジニ・グループが訴訟を起こしており、その土地が彼らと結びついていることを証明するために、民族学者の協力を求めているのだ。

このような直接的な支援ではないにしても、現地の人々の視点に立ち、その利益となるものを志向しようという意気込みで、私はアボリジニ世界に足を踏み入れた。

3 子供を通して距離を縮める

しかし、感情はなかなか理論通りに動くものではない。正直に言えば、初めてアボリジニの人たちに紹介された時の私には、怖い気持ちが先に立った。肌の黒さが際だっているので、まず表情が読みとりにくい。プロカメラマンは、絞りを一段明るくしないと写らないと言うほどだ。彼らは一般に部外者に対する警戒心が強く、愛想がいいわけではないから、なおさら表情は固い。おまけに、身なりはラフで薄汚れて見えるうえ、何だか不潔な人たちというのが、私の第一印象であった。

私の仕事はソフトウェアづくりだから、当初は用意してもらったプレハブ宿舎にこもってパソコンに向かう日々であったが、


プレハブ住居に乱入したわんぱく坊主たち

息抜きがてら、町のマーケットに買い物に出かけると、大人たちは見知らぬ振りをする中で、子供たちは遠慮なく声をかけてくる。「名前は?」「何してる人?」。煩わしいと言えば煩わしいが、大人のアボリジニたちとコミュニケーションが未だできない当時の私には、子供たちの屈託のない好奇心がまことに嬉しい。そのうち顔見知りのわんぱく坊主が私の住むプレハブに押し掛けてきて、一緒に遊ぶようになる。一人一人の個性がわかるようになると、いつしか肌の色は、私の意識にのぼらなくなってきた。昨日、パソコンに悪戯をしたあの子の肌は白かったっけ、黒かったっけ? やがてその子の親と口を利くようになり、徐々に大人たちとも親しくなっていった。

4 生活を共にするなかで

四輪駆動車に便乗してアボリジニの村を尋ね、数泊のテント暮らしも経験した。行政主導で作られた町での暮らしだけでなく、かつて行っていたようなブッシュの中での狩猟採集生活を復活する運動が一九七〇年代初めから起こり、その基地となる村がたくさんつくられるようになったが、私が訪れたのも、そんな村の一つである。

村人と一緒に寝泊まりし、狩猟にでかけ、共に川遊びをする、そんな日々を数日過ごし、彼らの文化について学ぶうち、いつしか私の抱いていた彼らに対する距離感は縮まっていったのである。

彼らは元来移動型の狩猟採集民である。耐久消費財を持って移動するのは不便だから、その場その場で木ぎれや石を加工して道具をつくるなど現地調達を基本とする、できるだけ身軽な暮らしぶりである。物質文化は簡素なのだ。家だってそうである。半年続く乾期には雨は全く降らないから、簡単な小屋掛けで充分だ。彼らに言わせれば、風の通らない堅固な家の中で寝るのは健康によくないのだ。

実際、野外で涼しい風に吹かれながら、乾いた砂地に身を横たえる心地よさを私も味わった。陽にあたって乾燥した砂は、清潔なのだ。彼らの物質文化が簡素であることを知り、同じ場での生活を体験するにつれて、彼らの身なりが薄汚れて見えたのは、日本という気候風土や生活スタイルに規定された偏見に過ぎないことがわかってきた。

5 文化に対する敬意

簡素な物質文化に比べ、精神文化の豊かな点がアボリジニ文化の特徴である。ドリーミングと呼ばれる神話時代、万物を創成した精霊たちは彼らの祖先となった。精霊たちが何らかの行為をした場所は聖地である。アボリジニの人生にとって重要な、豊穣、成人、葬礼などの儀礼はすべて、精霊の力を呼び起こすために行われるのであり、その際に参照されるのが各所の聖地である。村で数泊するうち、村人は私をいく

つかの聖地に案内し、そこにまつわる様々な神話を語ってくれる。アボリジニが何よりも大事にしているのが神話世界であることが、彼らの熱心な語り口から伝わってくる。

彼らの絵画芸術も、元々は神話を描いて精霊の力を呼び出すためのものであった。ユーカリの皮に描かれた「樹皮画」を最初に見た時は稚拙だと思った私だが、背景となる神話を教えられ、絵に散りばめられた記号や象徴の意味を知るうちに、一貫した論理の美しさに心打たれるようになった。

小さな村の一戸だけの学校の前で

どのように不潔、不合理、稚拙に見えようとも、それぞれの文化要素には、その歴史の中で組み上げられてきた、首尾一貫する論理がある。それに対する謙虚な敬意を払うこと、それが異文化を理解する第一歩であることを、私は教えられたのである。

6 等身大で理解する

異文化との接触過程は、次のような三つの過程を経て進むと言われている。最初は双方に誤解や行き違いが生じ、距離が埋まらない。第二段階では、意志の疎通がうまくいき、感情の交流も進んで互いにわかりあえる喜びを感じるようになる。ところがさらに相手の文化がわかるようになると、今度は自文化との違いが目につくようになって、相手の考えやふるまいを理解はできるのだが、感情的には苛立ちを覚えるようになる。これが第三段階だと言う。

これにならえば、私はまだ第一段階に足を乗せただけに過ぎないのかも知れないが、同じ人間なのだという同一性に依拠しつつ、そして相違に敬意を払いつつ、過大な思い入れも過小な評価も交えないで、虚心に異文化のありのままを理解すること、これが異文化理解の基本ではないだろうか。

しばしば、物質文明への反発と自然への憧れから、アボリジニを「高貴なる未開人」と見なし、彼らを神聖化する人たちがいる。特に最近は若者を中心に、物質文化への反発と自然への憧れ、さらに精神文化への傾倒が見られるのが世界的傾向だ。これにかなうのが、アボリジニなど先住民の文化である。アボリジニは自然と共生し、精霊世界との交流に基づく豊かな精神文化を保っている。物質文化に偏重して環境破壊を続けてきたと西欧型社会を批判する人々にとって、アボリジニ文化は対極にある代替文化と映り、無条件に憧れを抱く。

しかし、これはその人自身の手前勝手な願望をアボリジニに投影した、誤った見方である。アボリジニ自身、自文化と西欧文化との接触の中で、悩み、開き直り、そして、したたかに、新たな文化を生み出しているのだ。そうした彼らの生き方をありのままに理解する努力を続けたいと私は思う。

（くぼ・まさとし）